

昭和五十年七月七日 〓講演

「成熟社会への条件」

評論家 草柳大蔵先生

〓紹介頂きました草柳でござります。一か月のソヴィエット社会主義国の取材旅行を終えて一昨日の夜、帰ってまいりました。皆さんもご承知のようにグリニッジの標準時を標準とした時間というものがありません、日本はたしかプラス九時間という時差というものがあります。現在日本時間は七時十五分でございますが、私の頭はまだ大体十二時ぐらい、お昼ぐらいの頭であります。時差なんていうものは私は三十二歳のときから外国に出るくせがついてしまいましたけれども、だいたい四十四、五歳ぐらいまでは帰ってきてても何でもなかった。一晩お風呂に入って酒を飲んでぐっすり寝てしまうと、もうケロッとして日本時間にもどってしまふんですが、今日のように五〇を越してしまふと、やはり時差というものが非常にききまして、一週間ぐらい、とれないんですね。私だけでなくて、じいさん達はみんな外国から帰ってくる、一か月ぐらい時差ボケというのがあります。私もまだ頭の中は寝たり起きたり、

ちやうど日本とヨーロッパの間が夜と昼が逆になるもんですから、その影響で時差ボケが頭の中に残っております。これから申し上げることが少しトンチンカンなことがあっても、それは私の頭のせいではなくて、時差のせいであると、あらかじめおことわりしておきます。

外国へ今度まいりましたのは、五月にベトナム戦争が終わったから、アメリカの極東戦略がどういうふうに変わるだろうかというのが非常に大きなポイントになりました、その手前にももちろんアメリカが極東から手を引くと申しましょうか、ダレス以来続いた国際自由主義軍といいましようか、あるいは自由軍的使命感というものに対する大変な反省が始まっていること。そして殊にベトナム戦争では国家財政に非常に強い悪い影響を及ぼし、それ以上にアメリカの若い世代たちの間に、アメリカ人であることについての価値観それ自体の疑いが始まった、というようなことで、ベトナム戦争が終わったということは、アメリカの歴史について

大きなポイントになるだろうということを考へまして、それで五月いっぱいアメリカに行つて、六月二日に日本に帰ってきて、そしてなかに二日間おいてまだ時差ボケのまま、今度は六月五日から共産主義とは何かということをもう一回見直すために、ソヴィエットとそれから東欧諸国を歩いて、それからパリへ出て、今度西側諸国における共産主義運動を主にして廻ってまいりました。

そういうことで、こういう大きな歴史の流れのなかで日本というものをとらえてみたいのです。この日本という国は非常にいい国で春夏秋冬、四季はめぐつてまいりますし、まあ今日は暑いですが、暑さといつても大抵いんならんで、サウジアラビアやクエートを歩いているときの暑さと比べると問題にならない。非常に住みやすいですね。例えば、私はクエーからオマーンまでずっと歩きましたけれども、ほんとに日中は四十八度から五十五度なんという日が続くんです。そうすると、外側に置

いてある車がカンカンに焼けちゃうわけです。そのうえで卵を割って落とすと。パツと目玉焼ができるんです。これがほんとうにカー・クックキングというのでしょうか。夜になっても寝られない。寝られないもんだから、皆毛布を持って外に出る。砂漠の砂というのは夜になるとキューと冷えこむんで、実に冷たくいい気持ちです。その上に毛布を敷いて皆ひっくりかえって満天下の星空を仰ぎながら、ベチャベチャ、いつまでもお話をしているわけです、二時三時まで。それが『千夜一夜物語』の基礎になるんですね。ところが、日本ではそうじゃなくて、わりあいと今日はちよいと暑いなあぐらいで済んでしまう。それから食物の種類が非常に豊富だし、料理方法が国民性というものもあって、非常にデリケート、デリカシーというものを持っていて、なんととっても暮しやすい。暮しやすいいもんですから自分たちだけの、日本人だけの価値観を持っていけば、そんなに生活に支障はない。だから世界がどうなろうと、日本の経済さえガタピシしなければいいんじゃないかという気持ちにだんだん陥りやすくなってくる。そんなもんですから国際社会に入らなければいけないという、この理念みたいなもの、あるいは掛け声はとて高いんですけども、日本人の社会に暮らしていると日本人の尺度だけものを考えてしまう。私たちジャーナリスト

でいいますと、これを「錆びる」というんですけれども、感覚が錆びてしまうんですね。ですから、無理にでも自分を外に出して、国際社会というひとつの大きな社会の中の One of them としてこの日本の位置づけをして、そこで明日、明後日の日本というものを考え直すという訓練をしょっちゅう自分に課していないと、自分を破ることができなくなる。

創造というものは常に自己破壊を伴うものとして、自分の価値観を破って行って、初めて新しい価値にめぐり合うわけですね。ですから、そういう人生の価値のめぐり合いというためには、まず自分自身の尺度をたたき破って見るということが、非常に必要なんです。その点で、私の師匠であった大宅壮一という、まあ狒（ひび）みたいなおじさんがいましたけど、このおじさんが非常にうまいことをいった。私は大宅さんの家に二年半ほど住んでいて、鉛筆削りをやったり、お便所掃除などをやったりして、ジャーナリズムの基礎修業をやったんです。あるときお風呂に一緒に入ると、いつでも大きな一枚岩みたいな背中を流さなければいけないんです。背中を流していたら、大宅さんがつくづくフツと考えて、草柳君、やっぱ人間には三つのめぐり合いがあるように思うっていうんですね。なんですかと聞いたら、最初は「読書」だ、「読書」と「友人」と「旅行」だ、そ

の三つだ、というんです。じゃそうかなあ、と思ってその当時は仕事が終わって自分の部屋にひきこもってから、日記に大宅壮一先生がこういった、「読書」と「友人」と「旅行」が三つのめぐり合いだと、というふうに書いておいた。それがようやく四十四、五歳になって、成程なあと分かってきた。全部自分の価値観を常に破ってくれるもの、新しい創造とめぐり合わせてくれるものなんです。殊にその「読書」というものは、千円か二千円を払えば、三千年前ぐらいの思想にふれることができるし、あるいはこれから先五百年ぐらい先のことを語ってくれる人にもめぐり合うことができる。「友人」というのもそうです。私の家に若い人が遊びにきますけれども、これはほとんど判を押したように全く性格の違う人が来るんですね。お互いにあんまり似かよった人間というのは、自分を見ているようでいやになっちゃって友達になれないんですね。私なんかもよくよく考えてみると、自分と正反対の人間のほうが友人になり易い。非常に豪放磊落で、お酒を飲んでもますます愉快になって、女の人に手が早かったり、そういう奴が私の友人になる。つまり、私がいかなる人間かはお分かりだと思う。そういうめぐり合いというのは大切だと。それから旅行というものです。Tour と Travel と二つあるんです。観光会社を Japan Tourist

Bureau なんていうのは、Tour ですね。それから Traveling 何々というのが。Tour と Travel とは違うかというのを、ダニエル・J・ブーアスティンという人の本が『幻影の時代』と訳されて、もう二年ぐらい前にたしか東京創元社から出ていますが、非常に面白い本で、そのなかに Tour と Travel はラテン語によると、全く違う意味になるといいます。

Tour というのは、要するに観光です、あちらこちら見て歩く、いまいわれているとおりの意味なんです。ところが、Travel というのは、観光とか旅という意味ではなく、「骨を折って経験を得る」という意味なんです。非常にキリスト教の精神の基礎になっているんで、パウロなんかわざわざアフリカに伝道に行く。一種の自分の使命感で骨を折って経験を積みに行く、新しい使命感で、あるいは使命感を起こさしめるエネルギーといひましようか、精神的エネルギーというふうに解釈したほうがいいと思うんです。現代というものを考えて見ると、もうご承知のように技術革新が非常に進んで、何でも便利になったでしょう。ですから「友人」ともめぐり会い、「読書」もめぐり会うことができる。人間というのはひとりでは生きられないですから、何かに連帯して生きて行かねばならない。そういうところが手さぐりでつかめるわけですね。ところが、「旅行」というのは、

旅行に限らず私たちの日常的な経験というものが、ほんとに自分が骨を折って経験を得たという、自分で手のひらにたしかにたしかめられる経験としてつかみ得たものがいくつあるかという、甚だ疑問なんで、このあいだ和敬塾の諸君はあの山手線を夜テクテクと歩いたそうですけど、それなんかトラベルに入るわけです。

一般的に旅をするというと、新幹線にのついたり、飛行機にのついたりして、アレヨアレヨという間にパツと目的地に着いて、それでサツと帰ってきてしまう。たとえば、このあいだ私のところに若い人たちがきて、「このあいだ、先生、富士登山をしてきた」といいます。「そりゃ、よかったね」といいましたが、私は一番最初に富士登山したのは小学校六年生のときだった。戦前の小学生は六年生になると、この辺の学校では富士登山をするんです。すると、最初「馬返し」というところでそろそろ高山病が始まって、大体二割位の生徒が落伍するんです。そこで「馬返し」で五時間位寝て、それからズーと登って行く。夜があげると、リーダーの先生が三合目の高山植物を写生させ、五合目にくると五合目の高山植物を写生させる。六合目から雷鳥が出てくるだろうと、ひとつひとつ山が変化してくる様子を、子供たちにめぐり合わせるわけです。頂上に着いたときには、

子供ながら持って行ったスケッチブックはいろいろの情報で埋まるわけです。その情報はまぎれもなく自分の目で見て、自分の手で書いた情報です。ところが、いまの富士登山というのはどうもそうじゃないらしくて、三合目にこんな高山植物が咲いていたろうという、そんな花咲いていたかなあ、と皆でいいます。いまちようど咲いている頃だよ、という、それが分からない。車で行くもんですからね。もつばらメーターを見ているだけで、花も雷鳥も雪深も分からない。なにしているんだ、といつても、だっていま五合目までバスが行っちゃうんだ、というんです。ただ車でパーと行ってしまふんですね。そして五合目から頂上まで登って、それでまた降りてきて、車に乗ってスーと帰ってくるんです。だから、富士登山といつても五合目から頂上までしか歩かない。つまり富士山の三分の一歩いて富士登山だということになるわけです。そうすると、私たちが子供のときにやった足で歩いてめぐり会ったものを、いま車で日帰りで会ってこられる、非常に便利になった。そして、「馬返し」で、十人のうち二割が落伍するなんていうそんな馬鹿なことはない。十人が十人全部頂上まで非常に快適な状況で行けるんだけど、その状況がもたらした結果というものが何かと考えると、今日のめぐり会いの価値というのがうかうかしているう

ちに自分の手からポロポロ落としていつてい
るような感じがするんですね。

テレビジョンとかラジオとかいうものも、大
変なものでして、テレビが一日十九時間十五分
ラジオが二十三時間三十分電波を流している
わけです。私は世界の大抵の国を歩いてまいり
ましたけれども、これほど電波のたれ流しをや
っている国は残念ながら日本以外にはない。い
ま私がしゃべっているスピードはたしか一分
間に三六〇音ぐらいのスピードでしゃべって
いる。ほんとうはもつと落して、一分間三五〇
音でしゃべるのが一番聞き易いんですけれど
も、三五〇音でしゃべりますと、この暑さです
し、食事のあとですから、相当眠ってしまう方
がいらつしやると思っています。少しスピードア
ップすると、それについてこようとして眠る間
がないと思えます。それでも眠い方はどうぞ
眠ってください。

三五〇音で計算した場合、一日四十二万音か
ら四十五万音ぐらい情報を浴びているんです。
そのなかには非常に有効な行動の原理になる
ような情報がたしかにある、あるけれども、そ
れよりももっと大きな問題としては、情報には
二つ種類がありまして、情報が飛んできた場合
に人間というのはどういう受け方をするかと
いうと、「連立」と「対立」という受け方をす
るんです。神様というのは私たちを非常に上手

につくつていて、「連立」と「対立」という精
神作用を情報のたびにうまく操作ができるよ
うになっている。連立できるといことは、か
ねて自分が考えていることを送り手がいった
場合に、うんそうだそうだ、俺も前からそう思
っていたんだという、それが連立できる。それ
からどうしても分からない、のどまで出かかっ
ているんだけれどもうまくいえない、そういうと
きに誰か送り手がパツとうまいこといって、意
義が分かった、価値が分かった、というときは、
よくいうように、心のうろこが落ちる思いとい
う言葉がありますが、そういうふうに連立でき
るわけです。ところが、一生懸命送り手がもの
を言っているんだけど、そうかなあ、そんな
なことあるかなあ、というように、自分がどう
しても同調し得ない場合、それは対立情報にな
ってしまいます。あるいは自分の生活経験と全然別
の経験をしゃべられる。例えば、アフリカの奥
地の土人たちの結婚の風習っていうのはどう
いう風習かというと、娘をもらいたい場合に、
豚を十頭持って行かなければならない。ところが
が、八頭しか持っていない。しかも娘さんと相
思相愛の仲で早く結婚したくて仕様がな。だ
もんだから、隣の家から二頭夜盗んできて十頭
そろえて、その嫁さんをもらった。ところが、
隣家の人はどう数えても自分のところの豚が
二頭いない。隣の家では八頭しかいないはずな

のにお嫁さんがきた。そこで俺んこの二頭は
あいつが持って行ったに違いないといって、そ
の男にかけ合つて、あの嫁さんの五分の一は俺
のものなんだ、五日に一ぺんは俺にまかせると
いうようなことをいう。そういうと皆さんお笑
いになるでしょう。ところが、そういう部落が
実際にあるわけです。そういう部落があるとい
うことが書いてあると、どうしても同調できな
いわけです。新婚旅行から帰ってきてですよ、
アフリカの奥地ですから新婚旅行なんてない
でしょうけれども、初夜から四日たつたら隣の
男に嫁さんを貸さなければならぬなんてい
うのは、やりきれんことで、どうしても同調で
きない。その場合は対立情報になってしまう。
その「連立」と「対立」というものが上手に出
るんですね。

とところが、活字を読んでいるときに、そうだ
と賛成したところには赤線を引いて、賛成でき
ないところには青線を引く。これはもう読書の
基本ですね。そうやって読んで行くと、三年目
に同じ本を読み返してみると、赤線の引いてあ
るところを読んで、俺はなんでこんな馬鹿なと
ころにそうだと思つたんだといって、自分の成
長を測ることができる。それから青線のところ
を読んで、なんだそんなことが分からなかった
のかといって、自分の青春を愛おしむなんてこ
とがある。赤線と青線が活字情報の場合は使え

るわけです。ところが、電波情報の場合は、テレビでチャンネルをあけると、草柳大蔵が司会して、「大学はこれでいいのかわかるか」なんてやる。そうすると、午後八時か九時になると、やつぱり「歌謡大行進」とか「八時だよ全員集合」のほうがいいわけです。どうしてもNHKの第三チャンネル（教育テレビ）なんか見る馬鹿はいなくて、皆大学はこれでいいのかわかるか、いいんだい。俺は大学に入ってるんだ、チャッチャッと他に回してしまおう。だから、自慢じゃないですけど、私なんか第三チャンネルを目のあたりにして出ているんです。一生懸命に、大学はこれでいいのか、日本の経済成長はどのくらいが適当か、なんていうことを大学教授とか、役人とか、財界人に出てもらって汗かくでやるわけです。その一時間番組をつくるためにコンテをつくらなければいけない。一か月か二か月前からスタートしてプロデューサーと打ち合わせして、台本を何校も何校も直して行って、出席する人にどういふことをいふつもりですかと聞いて歩いて、やつとこき一時間でやる。ところが、視聴率は〇・三%しかない。一%というのは八十万人なんです。だから〇・三%というのは二十四万人の人が見ている。考えて見ると、夜の午後八時からというのは皆一仕事終わって一風呂浴びて、いまだつたら冷たいビールでも飲みながら見るという時間でしょう。その

時間に歌謡大行進を見ないので、第三チャンネルを見る人間が二十四万人もいるから、日本は大したもんじゃありませんか。そうでも思わなければ、馬鹿馬鹿しくって出られない。討論会なんかでも、自分があの男は面白い、たとえば野坂昭如なんかベラベラどこに句読点があるか分からないしやべり方をしている。そうすると、それでもああいうしやべり方もちよつと魅力があるなあなんていって、ずつと聞いているが、その反対の人が出てきて、なにかものはつきりした言い方をして、日米安保条約がなかったら日本は、それじゃ自衛隊がいくら金を使ったらいいのか、その計算をしないで、日米安保条約廃棄なんていったって仕様がないうやないか、てなことをいって、そんな反動の奴いやだなんていって、ぱーとまわってしまう。電波情報の場合は対立情報があると、あつまんなない、つまんないと、カチャカチャとまわってしまう。折角われわれが連立と対立という二つの精神作用を情報に対して持っているのにも拘らず、チャンネル権というものが受手の方にあるもんだから、常に自分に連立できる情報だけを受けとろうとする。そういう「連立人間」がドンドン出来てくるわけです。そうすると、価値のめぐり合いというものが、最初にいったように、自分の物差しをボキボキ破壊して行って、明日はもっと新しい物差し、もっと高い、

もっと美しいものといつて前進して行くべきものなのに、いつでも自分に分かりやすい、自分の気持ちにとつて安らぎをもたらして、フィードバックのピットリくる情報しかとらなくなる。そうすると、そこに停滞が始まるという状態が起こり易いわけです。だから、日本のように情報化社会という言葉がありますが、今日の情報化社会はもう情報化の「化ける」という字が、むしろ「わざわい」の「情報禍社会」と考えると、自分が直接経験で情報を得ないで間接経験でその価値を得ようとする、そういう意味で情報禍があります。連立人間ばかり出来てきて、もっと深く質的にはかなりいい情報が来ている、自分のフィードバックに合う情報だけを得て、あとは捨ててしまおう、あとは消してしまおう。フェイド・アウトしてしまうという、そういう連立人間ばかりどんどん増えてしまおう。こういう民主主義社会というものは、非常にむずかしい社会で、なかなかこれはつくりにくいんですが、簡単ないうと選挙のときに湯川秀樹先生がお持ちになっている一票もラーメン屋の姉ちゃんも持っている一票も、投票するときは同じなんです。ある意味ではこりや大変なフィクションなんです。で、たいいてい投票するときには格好のいい人とか、一生懸命やっついていそうな人とかがトラックの上から白い手袋をしてかつこうよく手を振

るとですね、ああ、あれいい、ちよつといいじやないかというので、入れちゃう。ほんとは候補者たちの政策とかプログラムをカチツと読んで、そのうえで判断して理性的判断で投票しなければいけないのだけれど、候補者の方もフリーリングでやってくる。入れる方も自分のフリーリングで入れる、こういう風に片一方に情報化社会というものが進行していると、民主主義政治ないし議会政治というものが、フリーリングによって行われる。これは一種の感覚的なファシズムをもたらす以外の何物でもない。そういうむずかしいところがひとつあるんです。では、そういうものをどうやって直してぶち破って行くかというのは、これからの大変な課題であろうかと思うんです。

ところが私は非常に心配して、と申しましたうか、自分自身の問題意識みたいになって、いらいらして仕様がなないのは、自民党から共産党までの政界の指導者も財界の指導者もどういうことを言うかという、日本はもはや高度経済成長は望めない、これはたしかにそうですね。もういままでのように装置産業を真中において生産性のあげやすい機械産業をまわりに配置して、非常に上手な外国為替管理をやつて、こうして昭和三十五年に高度経済成長を遂げ、毎年毎年二ケタ以上の常に十何パーセントという経済成長率をあげてきた。こういう経済の

やり方をやったのは日本とブラジルとハンガリーしかないわけです。あとはみんな一ケタです。そのためには日本のように全然資源のない国はよそから全部資源を入れてきたわけです。日本の高度成長経済というのは二つの前提条件があつたわけです。これは経済学をやっている人はもうとつくに習ったことですが、第一は世界が平和であるということが大前提としてあつた。それから二番目には大きな資源の裏側に民族主義あるいは米ソのように超軍事大国の世界戦略がくつつかなかつたという、この二つの条件があつた。しかし世界が平和であるということはカンボジアとか、ベトナムとか、中東だとか、トルコだとか、ギリシャだとか、スエズ運河が開通するとまたインド洋の緊張が高まるとか、様々なことで、なかなか世界の平和であるという条件はいまも守れない、約束できない。それから、もう一つ、資源の裏側に米ソの軍事戦略がくつつくという問題は、アラブの石油問題を始めとして、次には銅、砂糖がそうなりますし、さらに綿ということで、資源の裏側に米ソの軍事戦略がくつつかないという保証はまず九十九パーセントない、と考えていいわけです。

それを考えると、日本の経済成長というのは、先ず外側の条件だけれども望み薄だ、しかも日本がこれだけ発展したのは先程いいましたよ

うな経済構造をつくつたからで、それ以上に自然環境として海岸線が非常に長いということがあります。日本のような小さな国で北アメリカ合衆国の海岸線と等距離なんです。その海岸線に工業地帯をつくることができた。ところが今日ではその海岸線にあと三つか四つぐらい工業地帯をつくることができるんですが、公害の問題がある。あるいは騒音とか、あるいは工場ができたために人間疎外が起るとか、いわゆる工業化社会に伴うマイナス要因というものが、この経済成長の十五年間にうんと働いてしまったために、三つ四つぐらゐまだ可能性があるがあるけれども、全部住民運動でたたきつぶされちゃつたわけです。ですから、それだけ余力はあるけれども、社会構造的にもはや出来ない状態にある。だから、外側の条件も内側の条件も、経済成長をこれ以上、いままでのように望めない。そうになると、何になるかという、これは大変おかしなことに、自民党の三木武夫さん、亡くなった佐藤栄作さんもそうでしたが、共産党の宮本顕治さんに至るまで、全部同じことをいうんです。どういうことをいうかという、成長経済の時代はなくなった、次は福祉社会だ」と、こういういい方をするんです。私はこれに非常に疑問をもつてたんです。というのは、私はこういうふうなフリーランサーで、いかなる政治勢力からも、いかなる会社からも

全部等距離で、ほんとに自分が風邪ひいてひっくりかえったら、その日から全然お金が入ってこないような、まあ一種の綱渡りのな商売で、ほんとうのフリーランサーであるために、どなたにでもお目にかかることができる。だから、三木さんから成田さんから春日さんから竹入さんから宮本顕治さんから、あるいは不破君にしても上田君にしても、みんな会って話してみると、皆成長経済が終わってから福祉社会だということなんです。これは不思議なことに、この点になるとイデオロギーというのはどこかへ消し飛んじゃうんですね。よく思うんですけど、宮本さんも成田さんも三木さんも、いずれも明治後期、大正前期の人ですよ。だから、お風呂場に行つて裸にすると、みんな越中禪をはいていると思うんです。その彼らが越中禪をはいてると同じように、経済成長のあとには福祉社会だという単細胞的決定で一致しているのは、私は決して奇異なことではないようにも思うんですね。

こんな馬鹿な話はほんとうはあり得ないんじゃないかと思うんです。何故かと申しますと、成長社会が終わった、次は福祉社会だというふうに、成長社会と福祉社会が、Aという社会がこつち側のBという質の違う社会へとびうつるようない方をみんながするんです。これは誠におかしいことで、福祉社会というのはも

もと経済成長がなければつくり得ない社会です。われわれが腕をこまねいて、次は福祉社会、ハイハイといつて福祉社会を出前持ちが持つてくるように出来る社会ではない。福祉社会をつくるためには、資本がいる、技術がいる、労働力がある。ほんとうに福祉社会をつくろうと思つたら、私たちはいま働いている分の一〇パーセントないし二〇パーセント余計に働いて、その一〇パーセント、二〇パーセント分の背中の汗を福祉社会のほうに、おじいちゃん、おばあちゃん使つて下さい、といつてさし出すのが福祉社会です。福祉社会をつくり出すための原資というものはどこから求めるのか、この議論が全然ないわけです。これはいままでの福祉社会論でいえば、それが一番進んでいるのはたしかに北欧です。スウェーデンであり、ノルウェーであり、デンマーク、これらの国はたしかに進んでいる。進んでいるけど、北欧の場合は経済成長率を四パーセントなり五パーセントぐらいにおさえて、そして片一方では盛んに福祉社会を建設した。どうしてこういうことができたかという、例の高福祉、高負担といつて高い福祉のためには高負担だ。税金をガバツとつてその分を福祉社会のほうへまわす。例えば、スウェーデンでは二〇歳代のサラリーマンが税金五十二パーセント、日本の金で一〇万円もらつて、五万二千円引きですよ。だから、そ

ういう高負担があるからそれを福祉社会のほうにまわす。私は実は一昨日フランスの経済ジャーナリストが送つてきてくれた空港までの車の中で、いま税金どのくらいになっているかといつたら、大体三十六パーセントになっていると言つた。これはあのジスカールデスタンが福祉社会、公共投資をするために、パーと付加価値税と総合所得税を上げたんですね。そして上げた分は必ず公共投資にまわすからという約束のもとに、社共もあまり反対しないで、国民的な一致を得た。私の息子は二〇歳代で、昨年早稲田を出て、いま海上火災の保険会社に入りますけれども、給料八万六千円ぐらいもらつていますが、五十二パーセントとるといつたらほんとうに家に火をつけて怒るだろうと思ふ。いま日本の中で、二〇歳代の人から五十二パーセント税金をとり、三〇歳代の人から四十四パーセント税金をとるなんて、とても考えられない。だったら経済社会があつて福祉社会を建設したいなら、こういうふうにくらまして、ふくらんだ分だけをまわして行くという考え方をとらざるを得ない。ですから、その経済成長が終わったから次は福祉社会だといういい方は、あきらかに間違いであり、間違いである以上に私は大変に危険だと思ふのは、日本の指導者層は自由民主党から共産党まで、ないしは経団連にせよ、あるいは日経連にせよ、東京商

工會議所にせよ、あらゆる経済団体が会合をやって決議をやると、やれやれ福祉社会の建設に向かつて歩みを進めなければならぬところで、みんな終わってしまう。学者の論文、新聞の論説、読んでごらんさない、みんな必ず結論は福祉社会になっている。

これは何を意味するかというと、日本の国中が一種の思考停止の状態に陥っているんです。経済成長の社会がもうあり得ないから、次は福祉社会でいいんだ。福祉社会といってしまえば、それ以上のことを考えようとしなさい。昨年三月か四月ぐらいから日本列島はひとつの思考停止という状況がもの見事におおっているように思う。そしていろんな論者が、福祉社会といってしまうはあたかも免罪符のごとくになる。では福祉社会の原資をどうするんだ、税金でとるのか、経済成長させるのか、あるいは軍備を廃止するのか、自衛隊の予算を廃止するのか。自衛隊の一兆何千億の予算を廃止して、翌年その予算をどういふふうにとるんだ、もう一回自衛隊をつくって予算をつけ、また翌年廃止するのか。日本はこんなにインフレになったけれども、まだまだ暮ししやすい国で、物資は沢山百貨店に溢れているし、割り合いに自由に勉強もできるし、大変な豊かさや自由があるが、私はこのなかでいま恐るべきことが起こっていると思う。それは思考停止という状態じゃな

いだろうか。言ってみれば、福祉社会というのは、あの円の外にある問題じゃなくして、内側の問題なんです。それをこういうふうにするか、どうするか、どのくらいにするのか、こういうふうにするのか、どのくらいにするのか、こういうふうにするのか、たくさん福祉社会のほうにわたしてしまつた場合は、今度は国全体が再生産の費用を稼ぐことができない。それだけ貧弱になる。そうすると経済が落ちこむでしょう。そうすると、翌年このシェアをどうやって産んだらよいか、という問題が起こってくる。だから、この経済成長と福祉社会というのは裏腹の問題で、同一円のなかの問題で、円の違う問題じゃないんですね。そこで考えて見ると、日本が経済成長させるに、五パーセントとか六パーセントさせなければいけないという。毎年毎年あと十年ぐらいは五ないし六パーセントの経済成長率を持つて行かないと、日本という国はやって行けないんですね。

それには二つの理由があつて、一つは現在人口は一億九千七百万四千人かな、今年の四月一日の人口調査がそうです。それ以後ちょっと交通事故や崖くずれなんかで死んだ人がいますから端数はちよつと違つてしょうけれども、とにかく一億九千七百万、これが一億二千万にふくれるわけですね。あと二千万人がふえてくる。ところが、国土の面積は広がらない。三

七万平方メートル、しかもその中の可住面積は十三・七パーセントしかない。ほとんどが山です。せまいせまい、しかも山の高い国ですね。その中であと二千万人増えたら、この人間をどうやって食わせて、どうやって着せて、どこに住まわせて、どこに生き甲斐のある仕事を与えたいのかという問題を、われわれは、次にやってくる世代に対する責任として同じ民族として持つていくわけです。もう一つは地方開発というのは、大分やられたのですが、一昨年のオイルショック以来、パタッと止まっちゃつて、依然として地方格差がある。地方格差を何とか埋めないと若い人がまたまた都会に集まつてきて仕様がなない。第一、地域社会というものが出来にくい。ふるさとというものがどんどんなくなつて行く。地方のほうにお金を注いで、地方に人材を送つて、皆さんも東京で勉強なすつて、大学を出て、東京にある一流会社に就職したいでしょうが、出来ることなら地方に帰つて、これから地域社会づくりの核になつてくれる人が一割か二割この和敬塾にいてもいいだろうと思ふんですがね。

そういうふうにしても地方格差というもの埋めなければいけない。そういう命題があつて、五ないし六パーセントはどうしても経済発達させなければいけないんです。ところが日本には全然資源がありません。あるのはあと

石灰石が一四六〇億トンぐらいある。石灰石なんてものはコンクリートのビルをつくるぐらいしか役に立たないのです。鉄鉱石から、銅から、ニッケルから、カーバイドから、全部輸入しなけりやいけないわけでしょう。現在そういう原材料の世界相場は日に日にあがっているんです。しかもそれに南北問題という民族問題、北半球と南半球の問題がからんでくる。ために資源はお金さえ出せば買えるという状態でだんだんなくなってきた。それに軍事戦略や何かからむ。これは政治の問題だから別として、純粹に経済だけの問題として考えても、この三年間に、資源は二倍半値上がりしているんです。殊に日本が必要とするロイター国際消費品目十七品目のうち十四品目が二倍半に値上がりしているんです。つまり、経済をふくらますということは、輸入もまたふくらまさないといけないということ。輸入をふくらますということは、端的に言えば、世界からインフレを輸入するということです。ですから、インフレになりながら経済をふくらまして、そして福祉社会をつくらなけりやいけない。ところが、現在の日本の指導者はどういうことをいうかという、選挙のとき皆さんは耳がたこになるぐらい聞いたでしょう。わが党の政策といって、自民党から共産党まで全く同じように、福祉社会を建設し、サラリーマン減税を行い、インフ

レを抑え、物価を抑えてご覧に入れますというんですね。そんなことができるわけはない。福祉社会を建設するには、こっちの経済をふくらまさないといけない。インフレを輸入しなればいけないわけですよ。それなのに、サラリーマン減税をし、物価を抑えることがどうしてできるんだ。そういう単純な矛盾があるのに、皆さんの票がほしいものだから、そういう嘘みたいなことばかりいい出す。そうして恰好のいいことをやると、連立人間が多いから、しゃべっていることはどうでもいい、あの人可愛いから入れちゃう、というようなフィーリング選挙が行われてしまう。

そういうとてもいろいろな条件をかみ合わせてみると、変なほうへ変なほうへと日本が歩き出しているんですね。だから、その福祉社会をつくるには、その分け前をどのくらいにしたらいいか、という論議の前に、何をもって福祉というのか、福祉の中身は何なのか、人間の幸福感とか充足感とか満足感というのはいか、何をいうのか、それが論議の対象にならなきゃいけないんですが、何をもって福祉とするかという論議は、いまだかつて私の見た範囲では、日本語で書かれたもののなかに一回もない。

もうひとつ大きな問題は、福祉社会論で、おじいちゃん、おばあちゃんの入る老人ホームをつくる、あるいは老人専門病院をつくる、とい

うような議論はたくさんあるんです。いま各県がそういうことをやっています。革新知事のところは、人気取りのせいもあって、一生懸命そういうことをやっている。東京都なんてその典型みたいないません。けれどもそういう建物を造ったとき、おじいちゃん、おばあちゃん的面倒を見てあげる、一生見てあげますという、そういうやさしい心の人をどうやってつくるのかという、そういう人間をどこでつくるんだという議論は、これまた一回もない。建物をつくらば福祉社会が実現できるような、そういうものの言い方が今日支配的になつていっている。福祉社会論がとえられればとえられるほど、私たちの精神的な内容は空洞化して行く。福祉社会論が盛んになればなるほど、それと逆比例して福祉社会論の内容は空洞化して行くということが、いまの状況ではないだろうか。

だから、問題の立て方が、どうも間違えているように思うんです。それで、いろんなふうにご考えたんですが、私は成長社会の次にくるものは、福祉社会じゃないと思う。もちろん福祉社会というのは、ひとつの経済行為として私たちはつくって行かなきゃならないでしょうけれども、その手前に、成長社会と比べられる社会というのは、いままでの歴史というものをずーと振り返ってみると、成長の次にくるものは、「成熟」であつたんじゃないだろうか、そうい

う感じがする。だから成長社会がひとつ終わつたところで、そろそろみんなが走りすぎている、つま先立って歩きすぎている、だからもつと足の裏を全部地べたにつけて歩いて行こうじゃないか、富士山だつて五合目まで車とばさないうで、「馬返し」までトボトボ歩いて見ようじゃないか。それこそ“Sunshine on my Shoulder”という歌があるけど、あれを歌いながら行つて見ようじゃないか、というようなこと。つまり“Sunshine on my Shoulder”の幸福感というものはあるはずで、われわれは便利さとか、合理主義、あるいは科学主義、あるいは技術革新、あるいはテクノロジー・オリエンテッド・ソサイティという、技術が主導して行く社会という一つの価値法則のもとに、やさしさとか喜びとか、生き甲斐感とかの充足感というものになくなってしまわぬように、それをもう一回とりもどして見ようじゃないかという考え方が出てきて、その考え方を社会のひとつの物差しにした場合に、どのくらいの経済規模が、日本で要るんだろうかという、そういう考え方にきりかえない限り、私は福祉社会論は成り立たないというふうに思う。つまり、成長から福祉がくるんじゃないかと、成長から成熟がくるんじゃないだろうか。次にくるのは成熟社会だというふうに思うんです。その私の考えを二つの情報がこう眼を開かしてくれた。一つは五年前

に出た本で、イギリスの政治学者の非常に優秀な人ですが、ガボール (Denis Gabor) という人が『The Mature Society』という本を書いている。マチュアに a がつくと、アマチュアになる。このなかで、成熟社会とはいかなる社会かというと、非常に簡単にいうと、労働というものを生活のために仕事をするんじゃないかと、仕事のために仕事をする、そういう社会だというまあいってみれば、仕事をするときに、明日あれをやらなければいけない、そうしなければ飯がくえないなあ、という精神的な obligation を感じないで、俺はこの仕事が好きだからやっているんだ、という社会、あるいはもつと泣かせる言葉として、父親の職業を子供に大威張りですて行ける、譲つて行ける社会をいうんです。ところが、日本の社会はちやうど逆で、おとうさんはこんな苦労して、下げたくない頭を下げて頑張ってきたんだから、せめてお前だけは大学出るよなんて、皆さんのうちの大概はそうでしょうけれど、そういうことをいわれて、そうすると、おつかさんも一緒になって鬼のごとき教育ママゴンになって、お尻をひっぱたくそうじゃなくて、鍛冶屋は鍛冶屋、大工は大工、庭師は庭師って、木と話しが出来る、こんないいことないぞ、お前もなれよといっておやじが大威張りで息子に職業を譲れる。そのためには、職業が一つの社会的な尊敬といましようか、

社会的評価を与えられていなければならぬ社会だということをお願いなんです。たしかにそうだと思います。ところが、日本の場合はどうもそうじゃなくて、ことに昭和三十五年に始まった高度経済成長というのはいろいろな価値観をつくつてしまつたんです。たとえば大学なんていつても、東京大学を頂点とした進学体系というのが、昭和三十四、五年ぐらいからカチツとできてしまふ。東京大学に入るためにどういう高校に入る。そのためどういう中学、どの小学校、どの幼稚園に入つたらよいか、その幼稚園に行くためには、三歳か四歳のときからバイオリンやピアノのお稽古をして、音感教育で天才教育をしなければいけない。その音感教育、天才教育に合うためには、どういふお産をしたらいだろうかということまでなつちやう。そして嫌がる子供の手をひいて、三つや四つの頃からピアノの先生、バイオリンの先生の家へひきずりこんで行つていくわけです。私は同年で非常に仲の良い友人に團伊玖磨君という作曲家がいる。團君と私は同年のうえに、もう一つもつと大きな共通点がある。ある本に出ていましたが、團伊玖磨と草柳大蔵というのは、例の字画で勘定すると、四十二画なんです。四十二画のところは團伊玖磨と草柳大蔵と二人が出ています。そして四十二画というのはどういふ人間なのかというと、天

下を取るか大嘘つきか、どっちかだと書いてある。私はドキツとして、團君に会ったときに「君どっちだと思う」と聞いたら、彼はいつも明快に、「作曲家なんていうのは、大嘘つきにきまつてますよ」と簡単に逃げられたんで、私のほうが天下を取らなければいけないのかと思っただんですが。團君にこの間話していたら、彼が同じことをいった。日本はピアノの生産台数では世界一なんで、バイオリンも、ギターもおよそ楽器の生産台数、生産金額は世界一。それから町の中にピアノ教室、バイオリン教室という教室があるのも、これも世界一なんですってね。にもかかわらず草柳君考えてくれ、一体世界の檜舞台でジュリアードとかコンサルバトールに行けば、三人に一人は日本人が学んでいる。それでいて世界の檜舞台でどんなピアニストが出たか、どんなバイオリンピアニストが出たかというんです。せいぜい世界的に通用するのは團君か小沢征爾ぐらいのもんでしよう。昨夜サンフランシスコで棒を振ってましたけれど、小沢君以外にあとピアニストとかバイオリンピアニストでチャイコフスキー・バイオリン・コンチエルトの第一バイオリンをひく人さえ、これだけのすごい音楽状況の中で誰一人生まれでないというの、一体なんだろうかと、いうことなんです。これこそ豊富のなかの貧困という大きなテーマになるんですけど、話をもともどす

と、進学のための音楽をやるなんて情ないことをやっていて、大体自分の子供が三歳か四歳でピアノを習わして天才に育つかどうかは、その前に種と畑を考えて見れば分かるようなものだと思う。よくよくおとつあん顔見れば分かると思うんだ。だから、そういう間違いがなぜ起こったかという、やはり東京大学を頂点とする進学体系というものが出来ちゃって、予備校へ行っても、もうコンピューターではじめられちゃって、ああ君は大学は無理だ、あっちへ行つたほうがいい、といつて、その人間の持っているある大学に対するあこがれとか何とかは、数値的にパッと切られてしまうような社会です。

どうしてそういう価値体系が出来たかという、片一方で工業化社会が進んで、いわば産業社会が大きなスピードで走つたわけでしょう。この産業社会に対応できるような人間をつくるための東京大学を頂点とした進学体系が出来たんです。だから、革マルなんか出てくるのは、当たり前なんです。この対応した形で、学問が好きでやってんだとか、俺はインド哲学でもいいんだ、就職困難で、卒業した場合にどこか地方の図書館にしか勤められないけれど、インド哲学をやってみたいといつて勉強する。そういう人間の持つている可能性とか、思念というものは切り捨てられるような進学体系が

出来て、でこれで対面してきたんですね。これはもともとの間違いです。ですから、もちろん日本のような資源のない国は、ただひとつ頼れるのは頭脳しかないわけです。だから、東大解体論があるけれど、東大解体して結構、一橋もぶつこわして結構、早稲田も慶応もいらない。全部解体して結構なんですけれども、かつて東大、京大、一橋があつたときにある種の人材が生まれた、頭脳エネルギーが得られた。それと同じ頭脳エネルギー、もしくはそれ以上の頭脳エネルギーが生まれてくるシステムの保証があるなら、いまの東大的なもの、京大的なものは解体して結構なんです。けれど、そういう保証をしない、いまの大学を全部解体したら、日本はものすごい知的沈下をするだろうと思う。知的沈下をしたら食っていきませんよ。こんな資源のない国は、絶対に食って行けないし、国際社会で戦うことはできない。それは、ハワイへ一歩出ても、香港へ一歩出ても、いかに日本はやはり知的資源に支えられていたんだということによく分かる。だから、解体しても結構なんだけれども、解体される以前の、大学の生んだ知的エネルギーを、あるいはそれ以上のエネルギーを生み出せるようなシステムがあるか、ないしは新しく出来ているなら、どうぞご解体ください。この辺の議論をふつとばして解体論だけやつたって、これは出演料か原稿料をかせ

ぐだけの話で、全く意味がない。むしろ連立情報だけで、こういうことをいえば、皆さん喜ぶだろうと思っっている人が、始めから連立情報を狙いうちに流しているだけの話で、送り手の大きな責任だろうと思う。だから、話をもとにもどすと、そういうふうには、東京大学みたいなものは、必要なかも知れない。しかし、そういう日本の知的エネルギーを支えて行く人と、それから東京都内で一番パンをおいしく焼ける人と、これが同じように尊敬を受ける社会、これを「成熟社会」というんです。東大が一番で出た、数理経済ができる、大変なもんだといったって一橋出て数理経済の大秀才だって、飯食わなければ生きて行けないでしょう。一体、彼のために誰がパンを焼いてやるのかということが問題です。その場合に一番おいしいパンを焼ける人、あるいはおおよそそういう才能がない、数理経済もできない、おいしいパンも焼けない、庭や草木の話もできない、あるいは動物を可愛がることもできない、何にも能力はないけれども、少なくとも他人の涙が自分の傷のように思えるとか、他人の傷の痛みが自分の傷の痛みのように分かるとか、そういうナイーブな心を持った人間というものは、いるものです。その人間も、東大卒と同様に評価される社会というものをつくって行かない限り、私はいくら福祉社会論を説いたって無理だろうと思う。

もう一つの私にとって素敵な話だったなあと思われるのは、石坂泰三さんというおじいさんがいる。財界の長老で、この間亡くなりました。この石坂泰三さんの米寿のお祝いがあった。米寿というのは、お米という字に「寿」を書く。どうして米寿というかというところ、これは当てるんですが、米を八十八と読むんです。そのときにいろんな人が立ち上がって「どうも日本の経済をここまでリードしてきて頂いて、有難うございました」といってお礼をいった。そうすると、石坂さんの答辞はたった三分間でしたが、私はそのお礼の言葉を聞いていて、短いスピーチでこれぐらいすごい、このくらい光ったスピーチはないと思った。

短いスピーチで世界最大のスピーチといえ、リンカーンのあのゲチスバーグの演説ですよ。あれは五分三〇秒、あのなかでリンカーンが“government of the people, by the people, for the people” 例の「人民の、人民による、人民のための政治」、これが民主主義だ。あれが五分半の名演説だ。そうすると、ほかの新聞記者がそれに全然気がつかないで、もう一人のウィリアムス・マークの演説のほうだけ各紙に書く。ところが、ワシントン・ポストの記者だけがリンカーンの前にあった二時間の演説を全部すつとばして、リンカーンの五分半の演説だけをのせたんです。そのために、あの

“government of the people, by the people, for the people” という言葉が永久に残るんです。そのとき千何百人という新聞記者がいるわけですが、そのなかからたった一人のワシントン・ポストの記者だけがめぐり会ったのである。だから、今日までその言葉が百何十年続いているんだということがいえると思う。

さて、さきの石坂さんが米寿のとき言ったのはですね、「誠にいろいろなお祝いをして頂いて有難うございました。ただ日本の経済、日本の国全体を考えると、私は孔子が陳にいたときに故郷の魯の青年のことを想い出して言ったあの言葉を思い出すんです」と言った。その言葉は何かというところ、「帰らんかな、帰らんかな」これは二つ続くんです。「我党の小子、狂簡にして、斐然として章を成す。未だこれを裁するの所以を知らざるなり」(子在陳曰。歸與歸與。吾黨之小子狂簡。斐然成章。不知所以裁之) 論語・公治長」という言葉なんです。その言葉の意味を実に簡潔に解釈しますと、「帰らんかな、帰らんかな、我党の小子、狂簡」というのは大雑把なことばかりやっていて、こまかいところに目がとどかないことをいうんです。斐然としての「斐然」というのは、織物の模様で、パターンです。斐然として「章」をなすの「章」は、織物という意味です。織物を織っている。「いまだこれを裁するの所以を知らず」は、わが党

の小子（故郷の魯の青年）は、大雑把な、力まかせのことばかりやって、こまかいところに配慮が行き届いていない。そして斐然として目にも奇麗な模様の織物を織っている。どんどん織物ばかり織っていて、その織物をどうやって裁断し、デザインして、人々に着せたらいいのかわかることを考えていない。ちやうど、今の日本の国はそれと同じで、狂簡、斐然として章を成しております。日本の経済は、どんどん量的拡大をしている。その量的拡大によってもたらされた経済的価値というものを、日本人なり、あるいは東南アジア、あるいは世界の人たちにどうやって使ってもらおうか、どうやったら具合よく利用してもらおうかということのほうにまだ頭が働いておりません。私は八十八歳でございます。これを裁する所以を考えるには年をとり過ぎているから、どうぞ後から来る皆さん方に、これを裁する所以を考えて頂きたい、といつて、石坂さんは挨拶を終えたんですね。私は今の日本の経済というのは進み過ぎ、その進み過ぎが停まったら、福祉社会という単細胞的発想が出たのかもしれないと思つた。これはやはり大雑把なことをやって細かい配慮が行きとどかないのです。例えば、一流大学を出て一流会社に勤めればいいという、ごく簡単なものすごい単純な価値観が出てしまう。それから斐然として章をなすで、いろんな大学がガタ

ガタ出来て、東京なんかは三人に一人が大学に入つて、その大学生がまた三人に二人ぐらいの割りで昼間から麻雀をやっているという状態です。誠に斐然として章をなして、こういう社会が「成長社会」だと思ふんですが、これを裁するの所以を考えて行く社会こそ「成熟社会」ではないかと思ふます。そういう眼からもう一度ゆっくり私たちの日常生活というものを考え直して見ると、どんなでしょうかね。

私たちは日本人論というものをよくやりますが、これはどうも昭和三十五年ごろからテイク・オフした、離陸した問題です。高度経済社会というひとつの構造下に生まれた人間をあげつらつてゐるわけであつて、もう少し長い時間をとつて、日本人の生きざまを長い目で見るという望遠鏡を失つてゐるように思われるんです。いま私たちは一日三食しますね。そして古くから味噌、醤油というアミノ酸を主食にしたご飯を食べて来ています。人間の食べものとか、食べ方とかは人間の生活に決定的な要因です。それがいつから始まつたかということは室町時代で、それまでは二食だったのが三食になったのです。室町にどうして三食になったかという、燈火の使い方がうまくなるんですね。燈火の使い方がうまくなるということは、生活時間が夜に向かつて延びるから、二食では足りないで三食になり、生なのばかり食べていたの

では、間に合わないから、味噌とか醤油とかの保存食をつくる。ではどうして燈火が延びたかという、大広間に人が集まるという状況が生まれた。どうして大広間に人が集まつたかという、足利義満以来、將軍の権力がどんどん落ちて行つて、守護とか管領とか、そういう地方の権力者が出てきた。いわば地方分権主義になつて、それまでのピラミッドの鋭い高い社会がペタンコになり、ちやうど今の三木内閣みたいなもので、しょっちゅう揺さぶられている。ペツチャンコになつてゐるものだから、人々が自由に行き来して自分たちで自分の生きざまを決定しなければいけない。そうすると、よその情報がある。だから往来が激しくなる。だからあの四国のお遍路さん、四十八か所めぐりなども全部室町時代に出てくるのです。後の芭蕉がそうです、宗祇もそうだし、西行もそうでしょう。みんなが外へ旅行するようになる。旅行するようにになると、よその土地の情報と財貨を得られる。そうすると、俺んどこでも作つて見ようといつて、経済が発達してくる。こういうふうにして、つまり人が集まる場所、つまり西洋の概念でいうと広場というものが室町時代には出てくるんです。だから、日本の場合はああいう教会を中心とした広場じゃなくて、お寺とか、あるいは何々街道とか、そうすると、人が沢山集まつてきて、燈火を置いて益々時間

が延びる、だから三食になる。

こうして室町時代からわれわれの生活態度というものが決まっちゃって、それから今迄の間に、日本人は外国からきたその文化ショックをどういうふうに吸収し得たか、どうやってそれを捨てたり自分のものにしてきたか、あるいは社会が変動してきたときにその変動のなかから生まれてくる価値を今度はどういうふうに新しい価値に結びつけたかということなんです。例えば明治維新というものがあって、薩長の下級武士が、二百年続いた徳川の幕閣体制をもの見事に崩した。停滞していた権力構造がそのとき崩れたんだけど、それじゃ新たな権力構造は何であつたかという、当時十六歳であつた天皇を奉じて、それに神道というひとつの哲学をくつつけて、天皇制国家として折角の革命的エネルギーを再び支配と服従のエネルギーに変えて行つたという見方があるわけです。それも一つのあからさまな日本人の生きざまであり、支配と服従の人間関係をつくる、一つの技術であつたわけでしょう。そういうことをポイントポイントで押えて行つたら、どうなんだろうかと思うんです。例えば、茶道というのがあるでしょう。皆さんのお母さんや姉さんがおやりになつていらっしゃるんじゃないですか。あるいはここにもクラブなんかがあるかも知れない。そうすると、あのいわゆる茶道、千利休などと

いう人が現われ、「わび」とか「さび」とか、「和敬静寂」なんていうでしょう。私の友人で裏千家の宗匠の千宗室というのがあるんですが、私より一つ年上なんです。彼は「和敬静寂」と四字を書くと、私が二〇回くらい講演した分くらいとるんですよ。誠にけしからんと思う。あれは嘘っぱちで、お茶は「和敬静寂」で始まつたとか、「わび」「さび」なんていうことは、千利休が出てからであつて、お茶は最初に出てくるのは「闘茶」、たたかうお茶ですね、「闘茶」という形で出るわけです。「闘茶」というのは、これはお茶器やお茶、これは中国からきたものとかお互いに自慢し合つて飲み比べ、そしてクイズをやるわけです。これは福建のお茶だ、宇治のお茶だ、そして当たつた人は棗(なつめ)をもらつとか、お茶道具あるいは脇差しをもらう。こういうクイズをやるわけです。ここに集まつてくるのは大名とか守護とか管領とか、それから堺の豪商とか、お金持ちさんたちです。そういう一種の金権社会です。金権社会があつたから、あのお茶のもつ流儀とかお茶の持つている面白さ、社交道具として面白さが一般に広がつて行つた。

こうなると、お互い金のある奴が強い、あるいはお互いに弁舌のたつ奴が勝つてしまふ。それでは折角のそのパーテイが駄目になつてしまふじゃないか。もつと教養的なものに変えて

行こうということになつて、何を美しいとするか、何をよいとするか、そういう標準を求め出したのが、村田珠光です。珠光はお茶だけじゃなく、織物とか、絵画とか書道にわたる文化人ですが、この珠光のあとをついだのが、千利休である。利休のときは、ちように在家仏教としての禅が武家仏教からさらに市民階級に入り、宗教というものは南無阿弥陀仏と唱えていれば仏様が迎えにきてくれる、という消極的なものではなくて、人間が自らその生死をあきらめるものである。生とか死という生きざまを自分で認識して生死をあきらめることが仏教である。これが仏なんだ。そのあきらめる眼というものも英知といいかえてもいい。それを仏というんだ。仏というのはあらゆる煩惱からほどけるから「ほとけ」というんだ。自己原理を中心とした自分の行動原理を基礎においた宗教というものが禅なのです。いま禅宗の坊主がテレビに出て押んで、なんだか親を大事にしなくなつた世を嘆いている。余計なおせっかいで、禅宗というのは他人に語りかけるものではなく、自分自身だけを磨いて行くものです。この禅が出て、それが千利休に行つたのです。

これが例の世阿弥という、自ら脚本家であり、演出家であり、しかもまた役者であつた人が、「能」という観念を持ち出してくるんです。その人の書いた『風姿花伝』によると、世阿弥は

十表現したいものを八でとめて、そしてあとの二というものは舞台の上で観客が解釈すべきだということを行っている。この観客が参加して成立する芸術論というのを、『風姿花伝』の中でもこの見事にいつているわけです。いまこれをイギリス人がロンドン大学で一生懸命勉強してますが、日本人はちつとも勉強しないのだけれど、それを見れば、あるいは悲しみというときに面（おもて）をつけて肩をふるわせてよよと泣きくずれる、観ているほうは、ああ泣いているな、という悲しみという一つの実在しか分らない。しかし、あの面をつけたのをちよつとつむいて、すーと体を動かしただけで、大変悲しい表情が出る。そのとき観客のほうは悲しいんだなあ、といってそこに参加してしまう。そういう Participation というものが行われて、舞台と観客とがドラマの進行について行くのが、一つの芸であるということを通じてそのころからいうわけです。これをすでに千利休がとつて、僅か二畳の部屋あるいは四畳半の部屋で茶道をやっている、そのなかに天地全体宇宙のめぐりを感じる、あるいは一本の椿をいけても、そこに春全体を感じる、これが日本人の生活環境じゃないかということ、ここでようやく日本人のいわゆる「わび」とか、「さび」という境地が出てくる。いわば蘭茶という形でお茶が成長してきて、そして村田珠光、千

利休を経て茶道が成立する、一つの価値観を持たせる。そこへ豊臣秀吉が出てきて、千利休をとても可愛がるんだけど、秀吉は何といつてもあの聚楽第のような桃山文化、お金を使つてキンキラキンの文化をつくる。これは田中角栄の先輩ですからね。秀吉は聚楽第をつくり、一般に服装なんかも派手になり、いわゆる桃山文化が成長して行つた。ところが、徳川五代將軍綱吉のときに至つて鎖国政策をとつたので、外国の情報が一切入らない。一切入らなくなつたところで、日本人はこれまで吸収した外国の情報を自分の中に溶解して、もう一度自分のものにして還元するという、吸収、溶解、還元の影響作用が非常にうまく働いた。なぜかという、日本の場合、まわりが全部海で、しかも支那や朝鮮から異民族がくるけれども、日本海側の海岸線が岬が多くて、馬で上陸してもすぐ岬にぶつかつて、向こうが越せないものだから、降りて農耕民族になり、マイホーム・ベースをつくり出したんです。だから、外国の文化が伝わつてくるときに、日本がヨーロッパやアメリカと違うのは、外国の文化を吸収する際に軍事的占領ないし流血の惨事を一回も伴わなかつたという特徴があるんです。これを外国に見ますと、例えば、シシリー島なんかは、古代にはフェニキア文化が入りました。それからサラセン、神聖ローマ帝国、ブルボン王朝、スペイン、

それからオーストリア・ハンガリア帝国、次にブルボンの力を借りて、ガルバルジーというふうに、シシリー群島を見ていると、バームクーヘンというお菓子をスパツと切つたように、諸種の文化が層をなしている。文化が層をなしているたびに何千人、何万人という昔の文化や価値観を持った人々が全部ぶつた切られて殺されてしまう。イギリスだつてそうでしょう。イギリスなんか、いま動物を大切にしましょうなんていつているけれど、あすこのランカシヤに紡績業が起きた。そこでインドの手織業者が織つている機織りがドンドン出てくると、イギリスの機械紡績が低賃銀なもんだから、ドンドン足をひっぱられて抵抗しえない。だから、インド人の機の織つておる人の手首を全部切り落とした。僅か一六〇年前ですよ。一六〇年前にイギリス帝国主義はそういうことをしたうえで、いまのイギリス文化というものをつくっている。だから、それを見ると、イギリスが全部植民地から持つてきた文化が層をなしているわけですね。日本はちよつとどその世界のそういったヨーロッパ先進国からはうんと遠く Far East にあつたために、しかも地形的に軍事的占領を伴わなかつたために、文化を自分のものに還元する作用をつくることができた。そして三代將軍家光のところまで自分たちの固有の日本文化というものをもう一回手さぐりを

要求したり、もう一回使いよくしたのです。こうして徳川時代にずーと成熟させることができたのです。そうすると、今度は閉鎖社会だけれどもお米経済で、お米経済というのは田んぼが広ければ広いほど経済の値打ちがあるわけですから、また元禄であるわけです。元禄であがったのを、また反省して文化、文政でしめる。文化、文政の文化というのは、いつて見れば、ちやうど、うんと地味なねずみ色の羽織をきていたが、パツと脱ぐと、うしろは真赤な模様がついていた、そういう文化になるんです。

だから、鬪茶で始まった茶道が、文化全体でいつてもそうなんですけれども、村田珠光、千利休を経て成熟させられて、それが豊臣秀吉という権力に結びつくことによって、聚楽第文化、桃山文化としてまた成長する。それがまた徳川初代の文化のなかで成熟し、元禄文化で成長し、それがまた文化、文政で成熟した。そして明治維新になって外国文化がドーと入ってきて、鹿鳴館時代という大きなステップを経て明治文化の花が咲いた。次いで大正時代に至り、今度はマルキシズムという反対の価値概念が入ってきて、それをどうやって選択し、日本ふうにどうやってこなして行くか、あるいはキリスト教もそうですね。キリスト教では内村鑑三先生とか新島襄先生とかいう方がいわゆる日本キリスト教というものをおつくりになって、そ

こで大正で成熟するわけですね。それがまた、今度は昭和には軍国主義というものが出てくる、というように、大体その六五〇年ぐらいのサイクルでとって見ると、日本人というのは成長―成熟、成長―成熟ということ割合と上手に繰り返してきたんじゃないだろうか。そんなふうにも思っています。だからただか昭和三十五年から今日までの十四年間ないし十五年間の民族経験の経済成長政策を一つ選択したのですが、これだけみて日本人についての価値観をきめるというのは、私はあまりにも近視眼的であり、それは民族ないし日本人を見たことにはならない。さらにそういう見方は次にくる社会を見るための一つの物指しにもなり得ないと思う。ましてや未来学なんていうのは、数量だけでそのなかに日本人の気質とかなんとかは全然関係がないから、これはもう私には考えられない。そうすると、やっぱり一回高いジャンプのためには長い助走が必要なんです、十五年ぐらいのその助走路じゃなくて、室町時代ぐらいまで一回帰ってみて、その辺から歩きながら助走し直し、そして五〇年以降の社会、あるいは二一世紀に向かっての社会のどこにスプリングボードを置いたらいいかを考えればいいじゃないだろうか、そんなふうにも思うわけです。これがその成熟社会の条件という、私のテーマなんです。ですからもし勉強されるといふこと

があつたら、それはもちろん社会的有用性というのも学問のなかにはあると思います。昔から学俗近接という言葉があつてですね、学と俗ですね。それは近接という言葉があつて、学俗近接ということをも最初にいい出したのは後藤新平という人です。そういう社会的有用性としての学問も必要ですけどもそれよりもっと手前に、私たち日本人社会はいかなる形をとりながら進んできたのか、そしてこれがどういふふうにも展開して行くのかということ、長いスパンの中で見て行く、そういう物差しを持って、これからいろいろな情報に接し、あるいはいろんな人とめぐり会つてお話をかわして行く、私はそのことのほうが大切なだろうと、あまりにも現実だけのテーマに目をしばられて行く、なかなか智的にふとって行くことができないと、そんなふうにも考えます。

えー、一分間三五〇音が一番聞きやすいんだと申しましたけれども、しまいのほうは大体瞬間風速三八〇音から三九〇音ぐらいになつたと思います。暑いところを早口で非常に聞き取りにくかつたと思えますが、おしまいまでこんなに静かに聞いて頂いて、ほんとうに有難うございました。これで終わらして頂きます。(拍手)

(文責在記者)

※当DVD収録の講演録には、現在では不適切と思われる表現が用いられている場合がございますが、講演時の時代背景等を尊重し、当時のままといたしました。